

Cortázar

タイトルコルタサル CORTÁZAR

著者ヘスス・マルチャマロ (テキスト)

Jesús Marchamalo (guión)

マルク・トリセス (イラスト)

Marc Torices (dibujos)

出版社ノルディカ・リブロス Nórdica Libros

出版年 2017年

ページ数 224ページ

言語スペイン語

読者対象一般・ラテンアメリカ文学に関心のある読者・研究者・デザイナー

ジャンル伝記・コミック

レポート作成 笠原未来歩

概要

アルゼンチンにルーツを持つ作家フリオ・コルタサル (

) の生涯を幻想的なイラストとともに紹介する一冊。「フリオ・コルタサル。痩せぎす、ひょろっと背が高く、黒髪、反骨精神のかたまり、黒ぶちめがね、顔立ちは永遠の思春期。最もよく知られ、そして愛された現代文学の作家のひとりであり、ラテンアメリカ文学の「ブーム」を語るうえで欠かすことのできない存在」。ヘスス・マルチャマロとマルク・トリセスによる本書は、作家コルタサルの人物像とその作品世界を、これまでになかった手法で描き出している。

あらすじ・内容

年代のラテンアメリカ文学「ブーム」を代表する作家の一人であるフリオ・コルタサル。本書は、その生涯をイラストとともに辿った伝記風コミックである。

年の夏、ベルギーのブリュッセルで誕生した。大戦の勃発を受け、スイスのチューリヒやスペインのバルセロナなどヨーロッパの各地を転々としたあと、一家はブエノスアイレス近郊のバンフィールドに居を構える。病弱だったコルタサルは読書の世界に浸って、少年期を過ごした。

年、ペロニズムの旋風が吹き荒れるなか、コルタサルは教師としてメンドーサに着任する。政府に反発する学生た

ちとともに大学占拠に加担したコルタサルは、警察により数日のあいだ拘束され、辞職を決断する。

年、短編「占拠された屋敷」が、ボルヘス主宰の雑誌に掲載される。すでに詩集を自費出版していたコルタサルは、作家としての道を歩みはじめる。

年にヨーロッパ各地を旅したのち、パリの学生街に身を落ち着けたコルタサルは、本の配達員やユネスコの翻訳官として働き、糊口をしのいでいた。そんな折、友人の作家フランシスコ・アヤラからエドガー・アラン・ポーの翻訳を依頼される。コルタサルと最初の妻アウローラは、物価の安いイタリアでしばらく生活することを決め、各地を旅して回る（試訳）。

年、コルタサルは二作目の短編集『遊戯の終わり』（木村榮一訳、岩波書店）を出版する。その後も短編集『秘密の武器』（木村榮一訳、岩波文庫）、小説『当選者たち』（Los premios, 1960）、寓話『クロノピオとファマの物語』（Historias de cronopios y de famas, 1962）を完成させ、作家としてのキャリアを築いていく。

キュー
バ革命
を契機
に、コ
ルタサ
ルはチ
リやニ
カラグ
アとい
ったラ
テンア
メリカ
の政治
問題へ
積極的
に参加
しはじ
める。
特にニ
カラグ
ア革命
への思
い入れ
は強く
、晩年

の1983年には『かくも激しく甘きニカラグア』（田村さと子訳、晶文社）と題する散文集を発表している。

年6月、コルタサルは大作『石蹴り遊び』（土岐恒二訳、集英社）を出版する。実験的手法を駆使したこの小説は大成功をおさめ、たちまちフランス語、英語に翻訳された。

一躍スターダムにのし上がった彼は、招聘を受けて世

界中を飛び回るとともに、南仏プロヴァンスはセニョ
ンに拠点を構えて創作を続けた。1977年、コルタサルは写真家キャロル・ダンロップ（

）と運命的な出会いを果たす。すでにアウローラとは離婚しており、またそののちに交際関係にあったウグ
ネ・カルヴェリス（Ugné Karvelis）とも縁を切ったコルタサルは、キャロルとの生活をはじめ。

この頃からコルタサルは体調不良に
悩まされるようになる。1981年には、緊急入院し生死の境をさまよった。病名は、白血病であった。

年、キャロルはこの世を去る。深い悲しみに打ちひしがれ、さらに病状が悪
化したコルタサルはサン・ラザールの病院に入院する。二日後、アウローラ
や友人らに見守られてコルタサルは永眠する。1984年、2月12日のことであった。

コルタサルはパリのモンパルナス墓地に埋葬された。彼の墓は、いまなお弔問客からの贈り物で絶えず彩られてい
る。

所感・評価

ラテンアメリカ文学の ブーム を代表する作家フリオ・コルタサルを題材とする本作は、事実の記録や伝達を目的とした単なる伝記にとどまらず、幻想的な色使いと独創的なコマ割りを駆使したバンド・デシネ形式の芸術作品に仕上げられている。ヘスス・マルチャマロとマルク・トリセスがタッグを組んだことで、詩的な文体と色彩豊かなイラストが相乗効果を生み出しており、一気に読めてしまう。ラテンアメリカ文学のファンや研究者のみならず、絵本やバンド・デシネなどのデザインに関心を持つ読者にもお薦めできる一冊である。

コルタサルについてはすでに少なからぬ数の伝記が発表されている。これは彼の作品が持つ魅力はもちろんのこと、（本作の紹介文にも明らかなように）コルタサル自身の人目を惹く風貌と、愛と波乱に満ちた人生が耳目を集めた結果であろう。

本書『コルタサル』は作家の誕生から死去までを描いているが、必ずしも時系列に沿って生涯が語られるわけではなく、随所にユーモラスな逸話が断片的に挿入されており、コルタサルの人柄が浮かび上がるような工夫が凝らされている。ジャズへの耽溺や愛猫とのエピソードなど、極めてプライベートな部分を前面に押し出した本書は伝記というより、写真とテキストを組み合わせたアルバム形式でコルタサルの趣味・嗜好を紹介したAurora Bernárdez y Carles Álvares (eds.), Cortázar de la A a la Z (Alfaguara, 2014) に近いのかもしれない。

年代に世界を席卷したラテンアメリカ文学の ブーム という現象は、第一に作品群の魅力と完成度によって引き起こされたものであった。しかし、このことに加えて当時のラテンアメリカにおける政治的大事件の勃発と、それに反応した同世代の作家らによる横の連帯・交流が、良くも悪くも世間の注目を集めていたという事実も、ブームを成立させた要因として見過ごすことができない。本書に散りばめられた種々の逸話はこのような側面を巧みに描き出している。

年のキューバ革命が取り上げられている。作家たちのつながりを示すエピソードとしては、パリの自宅を訪ねたカルロス・フエンテスが、その風貌の幼さからコルタサル本人を彼の息子と勘違いしたという有名な逸話（試訳）や、インドでのオクタビオ・パスとの友情などがある。このような目配りも、本書の特徴に数えることができるだろう。

しかし、何と言っても、本書最大の功績はやはり、簡潔な文体で綴られた選りすぐりのエピソードと魔術的なイラストという組み合わせの妙が独特な雰囲気を出している点である。背表紙の紹介文に書かれた「(コルタサル的人物像を)このような形で描き出した者は今まで決していなかった」という文言は、こうした特徴を的確に評している。マルク・トリセスのイラストがなければ文章は単調な説明で終わってしまうし、ヘスス・マルチャマロの文章がなければイラストは風変わりな挿絵でしかないだろう。このように、内容と形式が互いに補完し合い見事な調和を見せている点が、本作最大の特徴である。

コルタサル作品の多くはすでに日本でも紹介されており、とりわけ短編作品の大半は邦訳が存在している。本書は必ずしも作品を詳しく解説したものではないので、コルタサルをこれから読もうとする人にとっては入門書、コルタサルをよく知る人にとってはその世界をより深く理解するための一助となるだろう。ただし、上記の「あらすじ・内容」で原文を併記した作品については邦訳が存在しないため、日本語で直接作品に当たることができないという点がネックになるかもしれない。

テキストを担当したヘスス・マルチャマロ(

)は、ジャーナリストや大学講師としても活動しているスペインの作家である。ラジオや新聞の賞を数多く受賞しており、主に文芸関係の著作を発表している。2011年にはコルタサルとその蔵書を題材とした *Cortázar y los libros: un paseo por la biblioteca del autor de Rayuela* (Fórcola, 2011) を出版している。

イラストを手がけたマルク・トリセス (Marc Torices, 1989-) はバルセロナ出身のアーティスト。「Zángano Comix」社の共同編集を務めており、卓上出版 (DTP) イベント「Gutter Fest」の発起人の一人でもある。作品は「Nabrow」「Apa Apa comics」「Autsaider Cómics」などの出版社から発表されている。現在は挿絵やアニメーションの分野で活躍している。

試訳

(パリに住むコルタサルをメキシコの作家カルロス・フエンテスが尋ねる場面 [pp. 143-144])

ある日、彼 [コルタサル] を訪ねてカルロス・フエンテスが家にやってきた。

[帽子を取り、ドアを叩くフエンテス。扉が開き、黒い人影が現れる]

ドアが開けられ、すらりと背が高く、痩せぎすで髭ひとつない若者が現れたのを見て、フエンテスはこう言った。

フエンテス：やあ、坊や！お父さんに知らせてもらえるかい？

コルタサル：入って、カルロス、私の父は私自身だよ。

(エドガー・アラン・ポー作品の翻訳を依頼され、妻アウローラとともにイタリアに移住し、各地を旅して回る場面 [pp. 146-152])

年、ブエノスアイレスで知り合った作家フランシスコ・アヤラが、彼の勤めるプエルトリコ大学を代表して、ポーの小説とエッセイの翻訳をコルタサルに依頼した。

[カウチに腰掛け、電話をかけているフランシスコ・アヤラ]

バンフィールドで初めて読書と出会い眠れぬ夜を過ごしてからというもの、コルタサルに付き添ってきたあの作家であった。

[本を読んでいる幼少期のコルタサル]

3000ドルの報酬が約束された。当時としては相当な額である。

[電話口で驚いているコルタサル]

アウローラとフリオは、より安価な生活ができるイタリアへ移り、およそ一年のあいだそこで暮らすことに決めた。

[旅支度をする二人]

美術館とイタリア料理店が立ち並ぶローマのスペイン広場の近くに、二人は居を定めた。

[スペイン広場の遠景とそれを囲う赤い電車]

それから、二人はナポリ、サレルノ、フェラーラ、パドヴァ、ミラノといった各地を旅行した。

[赤い電車]

ベネチアでは、時計塔が面するサン・マルコ広場の近く、デイ・ドギの安ホテルに宿泊した。

[ムーア人の時計塔]

そこでは遥か上方の「ムーア人」たち、すなわち金槌で鐘を叩く二体のくすんだブロンズ像が、毎日に彼らを目覚めさせるのだった。

[ベッドから飛び起きるコルタサル]

二人はピサ、ポローニャ、ヴェローナと旅を続けた。

[白い地図上を走る赤い電車]

二人は最低限の荷物で移動した。

[電車の座席で読書するコルタサルとアウローラ]

二人は安い文庫本を買い、一緒に読んだ。

[本を読むコルタサル]

フリオは一ページ読み終わると、それを破ってアウローラに渡し……

[本を読むアウローラ]

彼女は注意深く集中して読んだあとで……

[電車の窓からページを投げ捨てるアウローラ]

……車窓からページを投げ捨てるのだった。

[風に乗って飛んでいくページ]

Source URL: <http://www.newspanishbooks.jp/read-report-jp/cortazar>